

Spinning of the Dreams : A Source of A. Uttley's Creative World

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 節子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4102

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



夢を紡いで

— A. アトリーの創作世界の源流を追って —

中野節子

独特な雰囲気を湛える予兆的な作品を残した詩人・画家、W. ブレイク (William Blake: 1757-1827) の例にも見られるとおり、英国には「予見する人」(‘Seer’) という特別な能力をもった文学者の伝統が存在する。彼らは溢れんばかりの豊かな想像力を駆使して、多くの夢の世界の事象を現実の世界へ移し変え、われわれの未来を予見したり、読者に今まで思いもかけなかった新たな視野を広げて見せてくれる。しかしながら、夢に現れた民族の崩壊の様を繰り返し人々に警告したダニエル等の旧約聖書の予言者を筆頭に、トロイ戦争の敗北を予見したカッサンドラや、夫シーザーの暗殺死を察知した妻の例にも見る如く、往々にして、夢の中で見る「幻」(‘vision’) の実体が不吉な将来の予見であることが多いために、そんな力を持つ者であるということを、殊更に口外しないという傾向がある。A. アトリー (Alison Uttley: 1903-94) という作家もその例に洩れず、自らの創作世界の源流ともなった夢の世界の経験を、減多に公に語ることはなかった。しかし作家としての名声も確立した頃、敬愛していた文学者、W. デ・ラ・メア (Walter de la Mare: 1873-1956) の、夢の体験を綴った『この夢見る人を見よ』(Behold this Dreamer) の刊行や、J. W. ダン (J. W. Dunne) の『時間についての実験』(An Experiment with Time) の出版に励まされるように、自らの夢体験を一冊の本にまとめて出版している。

『夢の素材』(The Stuff of Dreams, 1953) と名付けられたこの書物に明らかにされた、作家アトリーの夢の体験はまことに特異なものである。また彼女の創作の源流の一つがこの夢との関連にあったこと知り、あらたな驚きにもとらわれる。イギリス文学世界の伝統の中に存在する「予兆する人」・「幻を見る人」(‘Visionary’) と言われた文学者の流れを確実に踏襲した作家、A. アトリーの創作世界と夢の関連を探ってみたい。

1. 夢の魅力

アトリーは、『夢の素材』の冒頭、「夢と眠り」(‘Dreams and Sleep’)という章の中で、人類が未だ解決できないでいる物質界の三つの問題として、「眠り」と「記憶」と「死」をとり上げ、眠っている状態で見るわれわれの「夢」を、「夢は、詩や音楽と同じで、それ自身独特の野性的な美しさをもつ。夢の中では、それぞれ生きとし生きるものが有する神聖に対する驚異の念が高められる」(‘... Dreams, like poetry and music, have their own wild beauty. The sense of wonder at the divinity of each living thing is enhanced in dream.’ (SD14))と述べている。

まず夢の中では、時間そのものの概念に大きな変化が生じる。すなわち太陽の運行に沿った日常の時間はそこには最早存在せず、代わって意識が静まったところに、「永遠の完全な時間が発動してくる」(‘the absolute time of infinity comes into play’ (SD19))。そしてそのただ中で、われわれは普段はとてども体験できない「永遠」というときを瞬間的に体験し、その中に自分自身を解き放つ喜びを感じるのだと述べる。夢の中では聴覚以外のあらゆる感覚が活性化される。特に嗅覚は鋭くなり、小さな子供だったころ嗅いだ懐かしい田園の香りが彷彿と蘇ってくる。回りにはまるで大地の音楽のようなりズムが繰返される。夢をみる眠りの中で、自分自身がよりいっそう自覚され、身体がまどろむ分だけ、魂が目覚めるようになるのだと語る。また辺りの事物は、本来の持つ生命を示すようになり、すべてのものが永遠の中で息づくそれぞれ独自の価値を見せてくれるという。言わば、慣習や禁則から解き放された夢の世界で、人は本来の自分を取り戻し、身の事物や事象の本当の姿をとらえ直し、人が決めた約束ごととか、引力とか動きという自然の法則からも開放されて、完全な自由を得ることができると述べている。

2. 夢の記録

アトリーが自分の夢の記録をとりはじめたのは、46年以上の長きにわたって書きつづけた、「小さな灰色うさぎのお話」(‘Tales of The Little Grey Rabbit’)シリーズの第一作目、『りすと野うさぎと小さな灰色うさぎ』(‘The Squirrel, The Hare and the Little Grey Rabbit’, 1929)が出版され、子どもの本の書き手として一躍注目されるようになってから3年経った、1932年からのことであつたという。思えば、自分が夢を最も沢山見たのは、物理

学の学位を取るために通ったマンチェスター大学の若い学生だった頃のことだったと述べている。その頃の自分を称してアトリーは、「わたしは、極小であると同時に極大な主題、すなわち分子、光波、星の速度などを学んでいた」(‘... I was studying a subject which concerned the infinitely small and the infinitely great, electrons, wave-length of light, and the speed of stars.’ (SD48)) と言っている。友人のクリケット選手が試験に落第する夢を見たり、数学の試験問題を夢で解いたりしたこともあると語る。しかしそんな経験は、自分自身にとっては必ずしも歓迎されることではなく、夢が余りに的中していることに自らが戸惑い、また脅えもし、夢で見た科学の試験問題が現実に目の前に出てきたときなどには、折角の回答の機会をあえて放棄して、自ら困難な状況に陥ったこともあったと述懐している。往々にしてこのような能力を持っているという事実は、所有者にとってかなり重荷となってしまうことが多いのである。

しかしこんな彼女が創作の世界に手を染め、創作の主題を自分の幼年時代の体験に求めようと決めたとき、眠りの中で見る夢に再現される子ども時代の出来事や情景は、極めて貴重な意味をもつものとなった。こうした夢の中での数々の素材を使って、日常性と驚異性を見事にないまぜにした、アトリーの創作世界が生み出されていったからである。彼女は、自分の子ども時代のことを書こうとしたとき経験した時間の経過の状態を、過去そのものがそこに存在し、ときのただ中で待っていた。人はそこに入り込み、全ての事物を過去にそれがあった如く、また現在ある如く、あたかも永遠の中で見るようになる」と述べ、「それはただ単なる郷愁に満ちた追憶などというものではない。追憶よりもずっと強固なもので、人が別の時間と空間に移しかえられたときに見る一つの幻視 (vision) 状態の中で現れるのだった」(‘... This is not nostalgic memory, it is stronger than memory, it comes in a kind of vision, when one is translated into another time and space.’) (SD113) と語っている。彼女にとって夢の中での経験は、いわば空間と時間を突き抜けた永遠の時間への旅だったのである。

彼女は夢の中でかくれんぼをして遊び、空中を飛び回り、蝶の姿をした小人や、この世とあの世の中間の光に照らされて安らぐ人魚の娘に出会ったりしている。いずれの姿も鮮明で、いきいきとした存在として彼女の脳裏に留まり、やがて創作の世界の主人公となって、彼女の創り出した妖精物語の中

で、永遠の命を刻んでゆく

夢の世界は4つの相から成り立っているとアトリーは語る。縦、横、奥行きから成るわれわれの空間の相に、時間の相が加わった4相の世界である。第4番目の時間の相は、過去と未来を同時に併せ持ち、いわば「時間のただ中の世界」(‘It is the world in Time’), すなわち「永遠」(‘It is Eternity’)であったと言う。まさに「予兆する人」・「幻を見る人」(‘Visionary’)であった作家アトリーの面目躍如たるところと言えるのではないだろうか。グレイラビット、チムラビット、サムピッグ、セリーナとセリーヌというかやねずみや、小さな赤いきつねといったアトリーの動物ファンタジーの物語に感じられる、「全てが今ここにある」(‘everthing is ‘now’)といった臨在感は、こんなところに大きく関係した特徴である。それはまた夢の世界を自由に行きつ戻りつしていたアトリーという作家が、その経験の中で自然に身につけていった創作方法でもあった。彼女の生活で、次第に夢を見ることが、創作の世界を継続するために必須の手段にもなっていったことが分かる。というのも、夢の中では、忘れていた事柄を露わにする扉が開かれ、すべての事象が‘今’となる。あらゆるものがこの永遠の中に蓄えられているのだ。夢の中で人はこの状態に入ってゆける。心がこの現実を無視することが、より容易になるからである。そこに留まり、小さな経験の切れ端を集めることができる夢の中で、人に過去と未来の無限の中身が露わにされるのだと述べている。

3. 時を旅して

動物ファンタジー作家として、幼年文学の分野で不動の基盤を築いたアトリーは、同時にまたイギリスを代表するタイムファンタジーの作品をものした作家でもある。1939年に発表された『時の旅人』(*A Traveller in Time*)は、20世紀のロンドンに暮らす病弱な少女ペネロピー(Penelope)が、400年にわたるときを飛び越えて、16世紀のダービシャーの荘園に生活する貴族バビントン一家の、スコットランド女王メアリー救出作戦計画事件に巻き込まれて苦悩するといった物語である。

1935年7月26日付けの夢の記録で、アトリーは次のように述べている。

ある日、ダービシャーの旧家に招待されたとき、化粧室を使おうとある部屋の扉を開けると、そこで4人の婦人の姿を目撃した。彼女たちは髪粉を振りかけ、きれいにカールされ、高く結び上げた髪にレースの帽

子を被り、フリルとひだかざりをつけたロングドレスを着てテーブルにつき、カードゲームと会話を楽しんでいた。おもわず立ちつくす彼女の姿を見ると、婦人たち自身も、まるで幽霊を見たように動揺した。この話を館の女主人にすると、そんな部屋も廊下も現在は存在せず、あなたは多分、18世紀の古い昔の間取りにあった過去の部屋に入って行ったのであろうという。今はもう見えないこれらの部屋では、依然として昔の祖先たちの生活が繰り返り広げられていて、ときどき一家の中で特別の透視力を備えた人だけが、その有り様を見るのだという。彼女の母がそういう力を授かっていた人で、その母から同じような話を聞いたことがあるというのである。そして後になって、アトリーは特別にいきいきと脳裏に焼き付けられたこの出来事を、自分の創作物語『時の旅人』のなかに使ったのだと述べている。ただし、このときの体験をもとに書かれた物語の中では、時代はもう少し逆上った16世紀、館は自分の子ども時代の家があったダービシャーのバビントン家の荘園となっていると語る。(SD117-9)

創作物語の中では、夢の体験で見た4人の婦人は次のように描かれる。

... I hesitated and opened a door, and then stopped short, for in the room before me, down a couple of steps, were four ladies playing a game with ivory counters. They sat round a table and a bright fire was burning in an open hearth. They were young and pretty, except an older woman whose expression was cold and forbidding. Their dresses were made of stiff brocade, and their pointed bodices were embroidered with tiny flowers. On their heads they wore little lace caps, and I saw golden hair peeping out from one headdress. Each wore a narrow lace tucker round her neck, and rings glittered on white hands that threw the dice. All this I saw in the moment I stood transfixed at the door. Then a little spaniel rushed across the room and they turned and stared at me with startled eyes. They were as amazed as I, and sprang to their feet, yet there was never a sound. The older lady rose and I caught a glimpse of her scarlet shoe as she came towards me, frowning with hands outstretched as if to

hold me. (TT45)

これは主人公のベネロピーが、イアンとアリスンという二人の兄姉と共に、母の親戚に当たるティッシー叔母さんとバーナバス叔父さん兄妹が暮らすダービシャーのサッカーズ農園に到着した日の午後の出来事とされている。母方のタバナー家の女性の中に代々引き継がれた、透視力を持ったこの主人公が、400年の時の流れを越えて行く、不思議な時間を越えた旅の開始を告げる場面である。そんな彼女を姉のアリスンは、「この子は妖精っ子のよ」(‘She’s a fey’)と説明している。

また1938年7月22日の夢の記録には、母屋から納屋に続く道の途上で出会った、一人の婦人のことが記されている。帽子は被らず、襟のところに細い白いラッフルの飾りが付いたハイネックの黒い衣装を身にまとっていた。家から5マイル離れた、ウィングフィールド・マナー (Wingfield Manor) にも囚われていた、スコットランド女王メアリーの侍女をしていたと彼女は語る。年格好は45歳くらい、あまり美人とはいえないものの、いかにもきびきびと立ち働きそうな、話の上手なこの婦人に出て、アトリーは、もう少し前に知り合いになれていたらよかったのと考えている。もう自分はその本を書き上げ、出版社に回してしまっていたからである。また婦人に出会った場所は、自分のお気に入りの昔の野原 (Whitefield) であったと記している。二人は会話を交わしながら、夢の中で散歩する。その話題のなかで取り上げられる花の名前にまつわる会話は興味深い。花々は永遠の命を有し、それぞれの時間の相の中で存在しているとアトリーは言う。そして夢の中で彼女は、「わたしは自分が幽霊に会っている幽霊だということを自覚していた。そして二人ともそのとき、空間と時間の外に存在していたのだ」(‘... I think I was a ghost meeting a ghost, both of us out of space and time ... (SD122))と述べている。

1935年3月24日付けの夢の記録には、『時の旅人』で詳しく扱うことになるバビントン事件の首謀者アンソニー・バビントン (Anthony Babington) を思わせる人物の姿を見た夢が記されている。その男はレースの装飾りのついた豪華な衣装を身につけ、荘厳で、堅固な造りの部屋に佇んでいた。武器や工作工具の掛けられた壁、動物模様のタペストリーなどに至るまで、しっかりと脳裏に刻み込んだ夢の場面であった。目覚めた後まで鮮明に残っ

ているそのときのその情景は、自分がぐり抜けた扉、階段や手すりの欄間の細工までもスケッチできるほどのものであり、このときの印象を核として、創作タイムファンタジーの世界が生まれることになったのだと述べられている。(SD125-6)

物語の中では、ペネロピーがアンソニーの姿を見る場面は次のように描かれている。

I put out a hand and lifted the shadowy latch, and stood on the threshold, not venturing to take a step, held breathless by what I saw. There in the room, brooding in the firelight which dappled the walls in pointed flames, was a young man. His gloomy handsome face was in the shade, his hands clasped round his knees. His hair was flaxen, curled and shining like fine gold in the light, his chin had a little beard, pointed and downy. His clothes were rich but stained and splashed with mud, his doublet open at the neck, where he wore a narrow lace collar. His leather thighboots stood wrinkle and drooping in the corner, and on his feet he had soft scarlet shoes with slashed toes. I stood still as a dream, watching him, hearing his sigh, seeing his breast rise and fall, and his fingers move convulsively (TT91)

アンソニーはバビントン一家の館サッカーズの当主。妻メアリーはやがて初めての子どもを産むことになっており、このところ心ここにあらずのように見える夫の姿に不安を抱きながらも、期待に満ちた日々を送っていた。しかしこの若い夫は、ロンドンに出て政治の世界に首を突っ込み、当時最大の政治事件、スコットランドの女王メアリーとエリザベス一世の政権争いに加担することになる。ダービシャーの名家をたらい回しにされている悲運の女王メアリー救出計画（後にバビントン事件と呼ばれる）に首謀者として加わり、やがては一家離散、御家断絶の悲劇をもたらす張本人となる人物である。文中に描かれる、泥に汚れた豪華な衣装、血の色を思わせるような真紅の靴などには、やがてこの一家が遭遇することになる悲劇を予兆するようで、心が痛む。

1926年3月29日、実家のキャッスルトップ・ファーム (Castletop Farm) で父テイラー氏が亡くなり、1930年9月13日に母がマトロック・グリーン (Matlock Green) の養老院で亡くなると、アトリーの故郷クロムフォード (Cromford) 村は、彼女にとって永遠に失われた遠い存在となってしまった。二つ年下の弟が農場を引き継いでいたが、どう言うわけか二人の姉弟の間に交流があったという証はない。事実アトリーが実家を訪れたという記録は、夢の中での訪問という形で残されているのみである。(1951年7月22日、早朝の夢の記録参照) 彼女はこの記録のなかで、自分の生家を夢の中で再三訪問していること、野原の道の脇にそびえ立つ古い樫の木や、今はもう切り倒されてしまった堂々としてしかも優雅なとねりこの木のただずまいを、一枚の葉や枝に至るまで、その生き生きと蔭をなす緑色と共に鮮明に思い出し、無上の幸せを感じたことを記している。中でも父テイラー氏の姿は、彼女の夢の中に再三現れる懐かしい存在であった。ダービシャーの大地と一体となっているようなその確かな存在感が、印象的である。父は娘と共に、自分の農場の「主人の小部屋」(‘The Master’s Chamber’) の下にある特別なベンチに座って、眼下に広がる森と野原を眺めている。二人が夢で見えるお馴染みの風景の中の緑の色彩は、あたかも内部から出てくる光で照らされたように、透明な美しさを帯びて輝いていたと述べられる。野原の草木は、様々な光の陰影を受けて輝き、太陽や雲や空を意識した葉の一枚一枚が、優しく低い声でお互いに語り交わしているようである。それぞれに独自の輝きを持った花が咲き乱れ、その様子はあたかも世界が初めて創造された日のような新鮮さを示し、喜び合っていたと描かれている。アトリーは、父との遭遇の様を、その大きな手の温もりと共に、本の中に残そうと決心する。そして完成した『時の旅人』の中で、自分は主人公の少女ペネロピー、そして父テイラー氏は彼女を受け入れてくれるバーナバス叔父として再登場するのである。

Uncle Barnabas had a favourite seat where one could always find him. It was under a great oak in the croft, near enough to the farm for him to see all that went on, but leaving him free of the bustle and business if he wished to be quiet. He sat there in the evenings, watching the moon rise above the woods, listening to the call of owls and the rustles of nocturnal

cratures. He went there when work was done, taking his rest away from us all. Sometimes I joined him, for he didn't mind my company; I could be part of the land and forget myself as he did. There we sat, my hand clasping his great warm fingers, as we waited to see the moon shadows and the starlight. Behind us in the house was the joyful preparation of supper, with Alison singing and Ian teasing. From where we sat we could see the glow in the kitchen, and the figures moving in the firelight, and it used to amuse us to watch them, unconscious of our gaze. (TT55-6)

このバーナバス叔父さんの姿は、アトリーの動物ファンタジーの傑作「サムピッグのお話」(‘Tales of Sam Pig’, 1939-65) シリーズに登場する森の賢者、4匹の子豚たちの御意見番であり保護者でもあるアナグマのプロック氏を彷彿とさせるような、彼女の作品に繰返し描かれるお馴染みの人物である。

4. 作家アトリーと夢の世界

1930年9月18日、夫ジェイムズ・アトリーは、マージー川に身を投げて亡くなった。精神的に落ち込んでの自殺と目されたその死にも、何事にも完璧を求める妻の過度な要求—特に二人の間で絶えなかった経済的な問題でのいざこざ—があったと推定されている。残された当時16歳になっていた一人息子ジョンと母は、この悲劇をまるでなかったことのように、お互いの間でも、また回りの人々とも、あからさまに語ることを避け続けた。しかし父親っ子であった思春期の息子ジョンの受けた精神的動揺は大きく、後の母と子の関係に微妙に影を落とすことになったと考えられる。ことのほか独占欲が強く、余りにも専横的で、支配欲の強い作家アトリーの蒔いた、家庭悲劇の有り様がしのばれる。こうして亡くなった夫に対する罪の意識の裏返しのように、彼女の夢の記録に現れる夫の姿は、常に限りなく明るい。1932年3月28日の夢の記録には、夫と二人、イタリアへ旅に出かけた様子が記される。笑いさざめきながら田舎道を歩き、イタリア語を話そうと試みる二人。しかし突然思い出される夫の死の事実。自分を置いて行ってしまわないでという妻の言葉に、「どうしてそんなことができる？ この世界はこんなにも美しいというのに」(‘How could I? ... The world is too lovely to leave.’)と答える夫。しかし現実の生活では、仕事に疲れ、家庭に平和な居場所を持

てず、自ら死を選び取らねばならなかった、売れっ子作家の夫としての姿があった。その事実をあくまでも認めたくない妻の創り上げた虚構の世界、それが作家アトリーの、眩しいばかりの生命讃歌にあふれたファンタジー・ワールドであるようにも思われてくる。

A. アトリーという作家にとって、自分の思うままに登場人物を創造し、動かしてゆける創作の時間は、まさに至福の時間そのものであったに違いない。彼女は「超自然の夢」(‘Dreams of the Supernatural’) という章の中で、不思議な夢の体験の数々を記している。

1943年7月22日の夢の記録は、「魂」(‘Soul’) との遭遇の体験である。

... I was carrying a small object in my half-closed hand, and it was a Soul. It was grey, luminous and winged, superhuman. It moved and fluttered and struggled as I held it in my encircling fingers. It was most important that I should preserve it from harm and I was anxious about its safety, as it lay in my grasp. It was vital that I should keep it secure on the journey I was about to take. It was the Soul belonging to somebody else, not my own, a Soul entrusted to my keeping. I felt no kinship with it. Indeed I wanted to get rid of it as soon as I possibly could, but I had to guard it until I arrived at my destination.

(SD134)

自分の旅程の最終地点、すなわち死に至るまで抱え、守らなければならぬと思い定めた「魂」。それはときには人間、またその他の小動物、そして或るときは道具の中にも宿る魂そのものであったのだろう。彼女は生涯、自分の手の中に託されたこの「魂」を大切に、創作世界の中に生かし続けたように思われる。

人は何かを獲得し、また失いながら生きてゆく。一方で、全てを抱え自分の意のままにしたいという強い欲求をもった人々も存在する。アトリーの綴った夢の記録の中で、彼女が極端に恐れていたのが、この喪失という感情であったことが分かる。1943年4月18日の夢の記録には、他ならぬ自分自身が、無の深淵の中に失われてゆくという恐怖が生々しく記されている。

... Louder and louder came my cries, as I fell into that abyss, and dropped into nothingness, moving with the velocity of light. I was not a human body, but something else, a mind, an eternity, but it was Me, my personality, that rushed through space and time. (SD185)

このような喪失の恐怖に苛まれつつ、あたかも自分自身が全智全能の力を持つ創造主でもあるかのように、永遠の命をもって生きる者たちの姿を、創作の世界で紡ぎつづけた作家アトリー。彼女の歓喜と苦渋に満ちた生きざまを彷彿とさせるのが、1943年9月2日の夢の記録に記された一人の少年の姿ではないだろうか。

I thought that an invisible power was there, holding the boy, and none of us could see it. He was assailed by a force too strong for a human being to bear. The boy was caught and was to be carried away in the net of this power, and we could do nothing. Only God could save him from that sinister and strong spirit, who was taking him captive ...

(SD187)

「邪悪なもの」(‘Evil’)と名付けられたこの夢の記録に記された少年、目に見えぬ力に囚われ、操られて、助けをもとめる孤独なこの少年こそ、創作という力に突き動かされ黙々と仕事を続け、92歳の死によってその孤独な作業から解放されるまで、作品を紡ぎ続けた作家アトリーの、もう一つの姿であったように思われてくる。

そこには、中国賢人の「禍福はあざなえる縄のごとし」という言にもあるように、一人の作家—希有な才能に恵まれた者—が背負うことになる祝福と呪いが、垣間見られるのである。

注

1. Alison Uttley, *The Stuff of Dreams*, Faber & Faber, London, 1953.
(文中では、SDとして表記してある。数字はページを表す)
2. Alison Uttley, *A Traveller in Time*, Faber & Faber, London, 1939.
(文中では、TTとして表記してある。数字は‘Puffin Books’ (Harmondsworth, 1980) 版のページを表す)

